

壤水分が不足して作柄への影響が懸念されたものの、その後は降雨に恵まれて作柄が改善した。

生産量は、収穫面積が増加（1.5%）するとともに単収も上昇（11.2%）することから、前年度より増加（13.3%）し、59.0 百万トンとなる見込みである。

写真：ロシア南部 ロストフ州（2014年3月）
休眠期が終わり、再成長を開始した冬小麦



写真：ロシア南部 ボルゴグラード州
開花期を迎える冬小麦（2014年6月）



米国では、冬小麦は、作付時期の土壤水分量が十分で発芽進捗率も過去5年平均を上回ったものの、その後、大平原中部及び南部で乾燥型の天候により土壤水分が不足するとともに、冬季の寒波、春の異常低温等で作柄が悪化した。春小麦及びデュラム小麦は、北西部での生育進捗は過去5年平均を上回り、大平原北部で低温湿潤型の天候により生育進捗が遅延して収穫作業も停滞したものの2014年9月末にはほぼ終了した。

生産量は、収穫面積が増加（2.3%）するものの単収が低下（▲7.3%）することから、前年度より減少（▲5.1%）し、55.1 百万トンとなる見込みである。種類別には、冬小麦 37.5 百万トン（対前年度比 10.7%減）、春小麦 16.2 百万トン（同 11.4%増）、デュラム小麦 1.4 百万トン（同 8.4%減）となる見込みである。

写真：米国中西部 カンザス州サリナ地方
雪に覆われた冬小麦畑（2014年2月）



写真：米国中西部 カンザス州ニュートン地方
乾燥状態で出穂期を迎える冬小麦（2014年5月）



写真提供：（左） Dr. Neal Blue

（右） Dan O'Brien, Extension Grain Economist, Department of Agricultural Economics Kansas State University

カナダでは、2014年6月の大雨により一部の産地で洪水が発生し、春小麦やデュラム小麦の作付けが出来なかったり、作付けた苗が流されたりする等の被害が発生し、その後も低温湿潤型の天候が続き、作物の生育が遅延した。また、収穫期も土壌水分過多が続く中で気温が低下し、霜害が発生したこと等により作柄が悪化した。

生産量は、収穫面積が減少（▲9.4%）し、単収も低下（▲13.6%）することから、前年度より減少（▲21.9%）し、29.3百万トンとなる見込みである。また、カナダ統計局「Production of principal field crops, November 2014」(2013.12.4)によれば、種類別の生産量は、春小麦は21.2百万トン(同22.1%減)、デュラム小麦は5.1百万トン(対前年比20.2%減)、冬小麦は2.9百万トン(同24.3%減)となる見込みである。

なお、カナダ穀物協会(CGC)「2014 Canadian Wheat Crop Quality Report」及び「Canadian Wheat and Durum Production」(November 2014)によれば、2014/15年度の春小麦(CWRS)の1～2等比率は54%(過去10年平均77%)、デュラム小麦の同比率は13%(同58%)となっている。

写真：カナダ アルバータ州エドモントン地方
春小麦の作付作業（2014年5月）



写真：カナダ サスカチュワン州ウェーバーン地方
雨雲が近づく中の春小麦の収穫（2014年9月）



写真提供：Dr. Neal Blue, Consultant, Columbus, OH（2枚とも）

豪州では、小麦産地の大半で2014年6月から7月初旬の降水量が平年並みで、比較的温暖な気候に恵まれたことから、作付作業は前倒しで進展して6月には終了し、発芽後の生育初期の作柄は良好であった。しかしながら、出穂期から乳熟期を迎える8月から10月にかけて、豪州最大の産地である西部のウエスタンオーストラリア州では降雨に恵まれたものの、東部の産地で降水量が平年を下回った。また、収穫時期には、ウエスタンオーストラリア州の南部の一部地域で降雨により作業が遅延し、穂発芽の被害が発生する等により作柄が悪化した。

生産量は、収穫面積が増加（2.1%）するものの、単収が低下（▲13.0%）することから、前年度より減少（▲11.1%）し、24.0百万トンとなる見込みである。

なお、今年度の単収は、豊作であった前年度に比べて低下するものの、2012/13年度までの過去10年平均を上回る見込みである。

写真：ウエスタンオーストラリア州 ホープタウン
発芽した小麦畑（2014年5月）



写真提供：Australian Crop Forecasters（2枚とも）

写真：ウエスタンオーストラリア州 テーレム・ベンド
成熟期を迎えた小麦の穂（2014年10月）



ウクライナでは、生産量の9割以上を占める冬小麦は、作付時期の2013年秋から2014年早春にかけては、寒波に見舞われた1月末から2月初旬を除いて気温が平年を上回り、冬季の積雪（スノーカバー）は少なかったものの越冬による被害は枯死率が0.1%とほとんど見られなかった。2014年4月末時点の作物の状態は2008年以来最高となり、その後も初夏にかけて温暖湿潤型の天候が続き、作柄も総じて良好な状態が維持された。収穫作業は6月中旬から7月下旬にかけて行われ、7月の局地的な集中豪雨や突風により、中部や西部の一部の産地では成熟期を迎えた作物に倒伏や黄化等による品質低下が懸念されたものの、他の産地では作柄が概ね良好となった。

生産量は、収穫面積は減少（▲4.1%）するものの、単収が上昇（14.7%）することから、前年度より増加（10.0%）し、24.5百万トンとなる見込みである。

写真：ウクライナ ドニエプロペトロフスク州（黒土地帯）（2枚とも）

気温が-10℃まで低下し、休眠期を迎える冬小麦
（2013年12月）



順調に生育し、出穂期を迎える冬小麦
（2014年5月）



カザフスタンでは、生産量の約 95%を占める春小麦の作付けは 2014 年 4 月から開始され、6 月上旬に終了した。北部の産地では 4 月から 6 月上旬にかけて乾燥型の天候が続き、一部産地では栄養成長期の深刻なストレスが懸念されたが、7 月には雨が降り、気温が低下した。8 月から開始された収穫作業は、10 月の降雨・降雪により停滞したものの、11 月上旬にはほぼ終了した。

生産量は、収穫面積が減少（▲5.8%）するとともに、単収も低下（▲5.6%）することから、前年度より減少（▲10.3%）し、12.5 百万トンとなる見込みである。なお、作付時期の高温乾燥型の天候により、小麦の作付けは減少したものの、なたねや亜麻仁等の油糧種子の作付けは増加したと見られる。

写真：カザフスタン北部 北カザフスタン州（2 枚とも）

春小麦の作付作業（2014 年 5 月）



乳熟期を迎えた春小麦（2014 年 8 月）

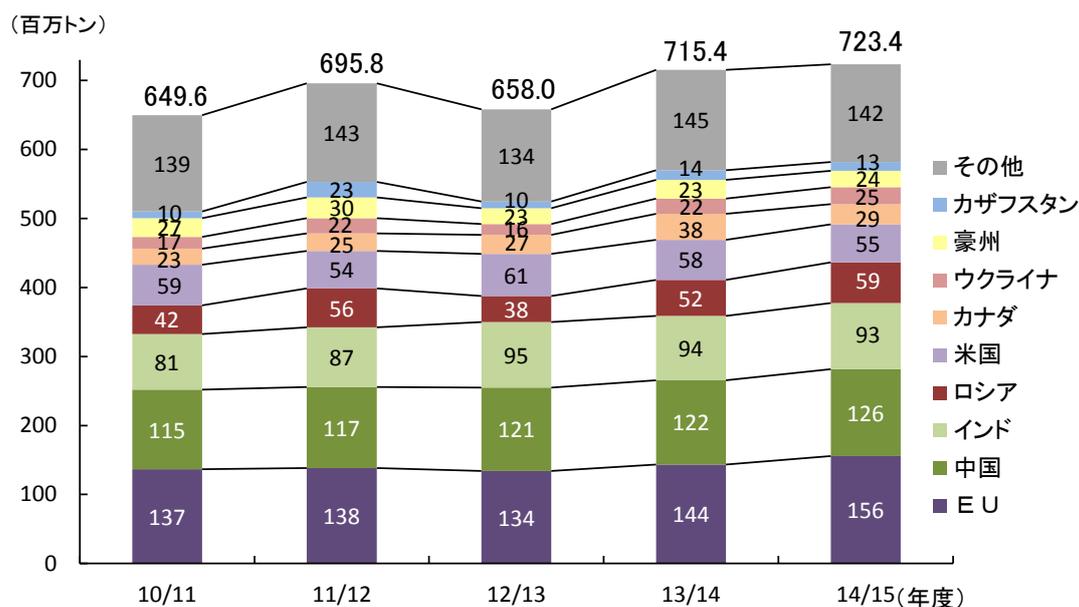


表 IV-3 小麦の 2014/15 年度収穫面積及び単収

区分	生産量		収穫面積		単収	
	(百万t)	対前年度増減率	(百万ha)	対前年度増減率	(t/ha)	対前年度増減率
世界合計	723.4	1.1%	222.29	0.6%	3.25	0.3%
E U	155.5	8.4%	26.80	3.8%	5.80	4.3%
中国	126.0	3.3%	24.10	▲0.1%	5.23	3.4%
インド	95.9	2.6%	30.60	2.0%	3.13	0.3%
ロシア	59.0	13.3%	23.75	1.5%	2.48	11.2%
米国	55.1	▲5.1%	18.77	2.3%	2.94	▲7.3%
(参考)						
カナダ	29.3	▲21.9%	9.46	▲9.4%	3.10	▲13.6%
ウクライナ	24.5	10.0%	6.30	▲4.1%	3.89	14.7%
豪州	24.0	▲11.1%	13.80	2.1%	1.74	▲13.0%
カザフスタン	12.5	▲10.3%	12.20	▲5.8%	1.02	▲5.6%

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「World Agricultural Production」、「PS&D」(January 2015)

図 IV-1 世界の小麦生産の状況



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「World Agricultural Production」、「PS&D」(January 2015)をもとに農林水産省で作成。

イ 消費量

2014/15年度の消費量は、人口の増加、都市化の進展及び所得水準の向上による食料用需要の増加や、特にEUでの飼料用需要の大幅な増加に伴い、前年度より9.2百万トン増加(1.3%)し、713.2百万トンと史上最高となると見込みである。

なお、2014/15年度の世界の消費量に占める国・地域別の割合を見てみると、第2位のEUが17%、第2位の中国が17%、第3位のインドが13%と、上位3カ国・地域で全体の約半分を占める見込みである。(表IV-4)

表 IV-4 世界の小麦消費の状況

(単位:百万トン)

区分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占める 割合(%)
世界合計	653.4	697.0	679.8	704.0	713.2	1.3	100
うち飼料用	114.9	146.6	137.1	130.3	139.4	7.0	
EU	122.8	127.2	119.3	115.8	124.5	7.6	17
中国	110.5	122.5	125.0	121.5	124.0	2.1	17
インド	81.8	81.4	83.8	94.0	94.0	▲0.0	13
ロシア	38.6	38.0	33.6	34.1	35.0	2.6	5
米国	29.4	32.0	37.8	34.2	32.2	▲5.7	5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」(January 2015)